

テストィング 応用

平成24年度シラバス

2012年 3月22日

国立情報学研究所

トップエスイープロジェクト

代表者 本位田 真一

1. 講座名

テストイング 応用

2. 担当者

加瀬 直樹

3. 本講座の目的

本講座では、産業ソフトウェアのテストイング問題を扱う。近年ますます大規模化・複雑化するソフトウェアの設計において、その動作の正しさを保証することがより困難になっており、プログラムの動作の自動的、または半自動的なテストイングの支援を行う各種ツールを使用し、実際のシステム開発に適用する方法を習得すること必要がある。しかし、これらのテストイングツールを使いこなすには多くの難しさがあり、普及への障害となっている。テストイング基礎で学んだテスト設計の技術は実現できてこそ価値を見出す。そこで本講座では、現実的なプログラムのテストイングを通して、ソフトウェア・テストイングの難しさを体感した上で、テストイングツールの適用における難しさを解決するために必要なノウハウの体得により、組込みシステムからネットワークまで対応可能な、ソフトウェア・テストイングの実装技術を習得する。

4. 本講座のオリジナリティ

テストイングツールを使用したソフトウェア・テストイングについては、従来多くの同様な講座が開講されている。しかしそれらの講座にはさまざまな問題点があったため、受講生が習得した内容を速やかに開発現場で適用するための障害となっていた。本講座では、それらの問題点を解消し、本講座受講後テストイングツールを速やかに開発現場で適用できるように配慮している。表 1 に、既存の講座の問題点と、本講座における解を示す。

表 1 既存の講座の問題点と、本講座における解

既存の講座の問題点	本講座における解
テストの概念と基本的な技法の習得を目的とした簡単な例を扱うのみで、開発現場での適用が難しい	基本的な例題から、複雑で現実的な問題に順に取り組むことによって、テストイングの基礎的素養を養うため、現実的な開発プロセスへのシームレスな組入れが可能

5. 本講座で扱う難しさ

近年、家電の制御ソフトウェアは大規模化、複雑化が進んでいる。特に、複数の家電機器がネットワークに接続され、相互に連携して動作することで 1 つの機能を実現する、ネットワーク家電市場が急速に立ち上がりつつある。従来の家電機器の制御ソフトウェアは単体で動作するように設計されていたのに対して、ネットワーク家電では、他の機器との連携動作のためのプロトコルなどが必要になるため、制御ソフトウェアが非常に複雑になる。さらに、ホームネットワークでは、動的に変更される接続相手の識別や、不安定なネットワーク環境などを考慮する必要がある。その一方で、大規模・複雑化、短納期化、頻繁な仕様変更対応など、開発体制の環境も厳しさを増している。このような状況においては、品質を確保するための網羅性と効率性を両立したテスト手法を用い、かつ効果的であることが求められている。また、既存開発や外注委託等の調達モジュールなど、外部モジュールとの組合せで製品開発を行い、品質を確保しなければならない状況にある。

5. 本講座で習得する技術

将来のネットワーク家電では、接続する機器や機器間で交換する情報の数・種類が従来型の家電機器よりも大幅に増加するため、その振る舞いの設計が大規模化、複雑化し、従来のアドホックなテストでは、プログラムの正しさを効果的にテストすることが困難になる。そこで近年では、テストケース作成やテスト計画における体系化されたプロセスや、単体テストツールやテスト管理ツールなどテスト作業を自動的、または半自動的にサポートする各種ツールの利用が進みつつある。さらには、テスト作業を中心にソフトウェア開発プロセス全体を再構築した、テスト駆動開発プロセスも広く知られてきている。

しかし、大規模ソフトウェア開発に、これらのプロセスやツールに代表される、ソフトウェア・テスト技術を利用する場合には、各種技術の背景理論を理解した上で、様々なノウハウを駆使しなければ、効率的かつ効果的に活用することができない。たとえば、テストケース作成プロセスにおいては、テストケースを構成するデータ構造を熟知する必要があり、またテスト駆動開発プロセスにおいては、従来の開発プロセスの常識から離れる必要すらある。

本講座では、ソフトウェア・テストの基本知識を前提として、テストケースをプログラムとして実装するための技術を学ぶ。テストコードとデータの分離、GUIを介したテストの構成、テストを実施する際の代用コードを動的に作成するモック、テストと仕様とのつながりであるビヘイビア駆動開発の技法を習得する。

6. 前提知識

本講座の受講生は、以下の項目を習得済みであることが望ましい。

- ・ テスティング 基礎
- ・ Java プログラミング

7. 講義計画

- 第1回：テストイング概論
- 第2回：テストイングフレームワーク
- 第3回：テストイングフレームワーク
- 第4回：データ駆動開発
- 第5回：テストダブル
- 第6回：モック (JMock)
- 第7回：モック (JMock)
- 第8回：モック (JMock)
- 第9回：GUI を介したテスト (FEST-Swing)
- 第10回：GUI を介したテスト (FEST-Swing)
- 第11回：GUI を介したテスト (FEST-Swing)
- 第12回：GUI を介したテスト (FEST-Swing)
- 第13回：ビヘイビア駆動開発 (BDD) (JBehave)
- 第14回：ビヘイビア駆動開発 (BDD) (JBehave)
- 第15回：最終演習、まとめ

8. 教育効果

本講座を受講することにより、実際のシステム開発、特に組込みソフトウェアの開発に適用可能な、ソフトウェア・テスト技術を習得できる。その結果、開発現場において、テストツールを活用することにより、信頼性の高いシステムを、効率的に開発することができるようになる。

9. 使用ツール

JUnit : 単体テストツール

- ・ 使用する上での難しさ
 - テスト用コードの記述が難しい
- ・ 使用上必要なノウハウ
 - テスト用コード記述ノウハウ
 - ✧ テストケースの表現
 - ✧ アサーションの表現
- ・ 選択理由、実用性
 - Java プログラムの単体テストツールとして広く使用されている
 - 特にテスト駆動開発には必須

JMock : モックフレームワーク

- ・ 使用する上での難しさ
 - スタブ用コードの記述が難しい
- ・ 使用上必要なノウハウ
 - スタブ用コード記述ノウハウ
 - ✧ スタブの動的作成
- ・ 選択理由、実用性
 - JUnit のモックフレームワークとして広く使用されている

JBehave : BDD フレームワーク

- ・ 使用する上での難しさ
 - 仕様とテストコードの対応付けが難しい
- ・ 使用上必要なノウハウ
 - BDD 開発ノウハウ
 - ✧ 仕様解釈コード記述
 - ✧ 仕様とテストのマッピング記述
- ・ 選択理由、実用性
 - BDD のフレームワークとして広く使用されている

FEST-Swing : Swing GUI のテスト自動化

- ・ 使用する上での難しさ
 - GUI が絡むテストの自動化が難しい
- ・ 使用上必要なノウハウ
 - GUI を介した自動テストの開発ノウハウ
- ・ 選択理由、実用性
 - 扱いが簡単で、概念を理解しやすい

10. 実験及び演習

講義内でソフトウェア・テストのプログラミングを行い、難しさを実際に体感しながらソフトウェア・テストの実装方法を体得する。また、利点、欠点についての議論を行い、どのように実問題に導入していったら良いかを常に意識する。

11. 評価

課題レポート、講義・演習の理解度、出席日数等を総合して評価する。

12.教科書/参考書

- Rick Craig (著), Stefan P Jaskiel (著), 成田 光彰 (翻訳), 宗 雅彦 (翻訳), 「体系的ソフトウェアテスト入門」, 日経 BP 出版センター, 2004.
テストの分析、設計・実装、実施、マネジメント、改善まで幅広く扱っており、この講義に最適である。
- Rex Black (著), テスト技術者交流会 (翻訳), 「基本から学ぶテストプロセス管理ーコンピュータシステムのテストを成功させるために」, 日経 BP 社, 2004
テスト管理手法について体系的に解説しており、この講義に最適である。